

「ママ虫」と罵られた 女性を書いた ベストセラー小説

斎藤 真理子

息子 が 小学校 4 年生 の ころ の こと 。 テレビ で 、 男性 看護 師 の ドラマ を や っ て いた 。 新 人 の 男性 看護 師 が も た も た し て 、 医 療 器 具 を 載 せ た カ ー ト を ひ つ くり 返 し て し ま う 。 す る と 、 先 輩 の 女性 看護 師 が う ん ざ り し た 顔 で こ う 言 っ た 。
「ほーんとに、男って、使えませんよねー」

その瞬間、息子はソファアの上に正座しなおして、心の底から悔しそうな顔

で「ちくしょう！」と叫んだ。それはまるで、昭和初期の女の子がお父さんに「女に学問なんか必要ない、嫁に行け」と言われ、台所の土間にしゃがんで悔し泣きしているところみたいだった。

彼の本気度にもあわてたのだが、すぐに納得した。息子は、というか息子たち男子のみなさんは当時、小学校で毎日、先生にこう言われていたのだ。「ほら男子！ ちよろちよろしないの！ ちゃんと並んで！ 女子を見なさい」って。データも何もないけれど、小学生の男子と女子を比べたら圧倒的に女子たちの方がしっかりしているのは、言うまでもないのである。それはもしかしたら女子の方が、その場で求められていることを早く察知して合わせるように誘導された結果なのかもしれないが、とにかく、圧倒的にアホっぽいのは男の子なのだ。そして息子はへらへらしていたが、やっぱり悔しかったのだらうなあ。

ちよっと自己肯定感が低下しているのかもしれないと思ったので、私は「あのね」と説明した。が、どこからどう説明したものか。こういうときは歴史を踏まえた方がいいと思ったので、まずはそれを試みた。

「あのね、昔はね、女は男より頭が悪いと思われていたのね」

「えっ」(固まっている)

「だから、女の人には、選挙権がなかったんだよ」

「えっ」(完全に固まっている)

……知らなかったのだ。

